

図書だより

〈第25号〉

平成3年11月25日

呉工業高等専門学校
図書委員会



夕方の閲覧室（9月）

目 次

[表紙]	1
[巻頭文] もっと図書館の利用を！	図書館長 今井 勲……2
[読書感想文]	
文学	
「十五少年漂流記」(ジュール・ヴェルヌ)……	M 1 轅立 晃……3
「小僧の神様」(志賀 直哉)……	E 1 松川 貴徳……3
「ハックルベリィ・フィンの冒険」(マーク・トウェイン)	C 1 畝本 紀子……4
「モーツァルト」(田辺 秀樹)……	A 1 佐々木 愛……5
倫社	
「不思議な人・ソクラテス」……	M 2 桑田 克美……5
「若く美しかったソクラテス」……	E 2 稲田 亮史……6
「受け身の達人・ソクラテス」……	C 2 猫崎 覚……7
「生涯強情だった人・ソクラテス」……	A 2 下井田裕二……7
歴史	
「2/26」(笠原 和夫)を読んで……	C 3 秋好 潤也……8
「物語・日本の土木史」(長尾 義三)を読んで……	C 3 岡田 和幸……8
「落日燃ゆ」(城山 三郎)を読んで……	A 3 金子 明子……9
「井上成美」(阿川 弘之)を読んで……	A 3 迫 真由美……10
[随想・読書雑感]	
「蝕まれる地球」(石 弘之)……	C 4 一本松環樹……11
「1980-1990 POST MODERN AGE」 (新建築 1990/8 臨時増刊)……	A 5 砂本 文彦……12
[新任教職員随想]	
時代と共に……	機械工学科教官 辻 昭雄……13
「医用生体工学」への招待……	機械工学科教官 森川 一……14
図書館の中で……	機械工学科教官 岩本 英久……15
空間系Hにおける、現象Pと観測機能Kに関する問題	建築学科教官 間瀬 実郎……15
週休土曜日のツクツクボウシ……	庶務課長 宮地 秀夫……16
放送番組の制作を通して……	建築学科教官 柳田 純……17
[私の推薦する本]	
水上勉著「閑話一滴」(P H P 研究所)……	一般科目非常勤講師 中村 一三……18
石ノ森章太郎著「マンガ青函トンネル」 (日本放送出版協会)……	土木工学科教官 加藤 省三……19
鈴木博之ほか監修「建築20世紀 Pt. 1, Pt. 2」 (新建築社)……	建築学科教官 篠部 裕……19
[新着図書30選]	20
[海外だより]	
拝会一経済部中小企業処 ～4月27日のメモより～……	校長 片島 三朗……24
[お知らせ] アンケート集計結果、平成2年度図書統計ほか……	27
[編集後記]	図書館長補 石井 義明……30

巻頭文

もっと図書館の利用を！

図書館長 今井 勲

今、図書館では、教官より推薦された図書を図書委員会にはかり、今年度前半の購入図書の整理をすませ、そろそろ後半の準備に入る所です。良い図書を選択し、購入することは図書館の最も重要な仕事の一つです。しかし、それらの図書を学生諸君に利用してもらえなければ図書館の存在価値は全くないのです。そこで、いかに利用してもらうかを考え実行することが同様に重要な仕事としてあげられます。

その一環として、今年度も5月にHRの時間を頂いて1年生にたいして図書館ガイダンスをおこなってきました。また、ご承知のように、放課後の時間が少ないために生じる図書館利用の不便さを解消し、特に利用者拡大を目指して、平成元年度より夜間開館を実施しています。また、昭和63年度より事務室の電算機により事務処理をしています。そのため図書の貸出しも瞬時に出来るようになりました。

さらに利用し易くするために今年度より閲覧室を土足のまま使用することにしました。当初いろいろとご心配いただきましたが皆さんのご協力のおかげで、今は特に汚れて困るということはありません。

上に述べた事等により少しずつですが利用者が増加していることを嬉しく思います。しかし、これだけの設備とサービスが行われているのに、現在の利用状況のままではあまりにももったいないことだと思います。もう少し図書館の利用について考えてみる必要はないでしょうか。

図書館利用にはいろいろな考え方がありますが、大きく分けて2つあると思います。その1つはレポートや宿題等のための調べもののためであり、もう一つは読書のためです。調べものについては、かなり利用されているようであり、問題なのは読書の方ではないかと思われれます。

近頃よく「活字離れ」という言葉を耳にします。しかし、書店のマンガや週刊誌などのコーナーは黒山の人だかりです。どういことなのでしょう。これは真の読書をする人が少なくなったことを意味しているものと私は解釈しています。AVの時代になり、何も

読書など苦勞しなくても他のものから短時間に簡単に情報が得られるようになったためではないかと思えます。それらのメディアは多くの分野で評価されていますが、また、同時にマイナスの面もいろいろと指摘されています。例えば、映像などを用いる場合は作者の考えがとかく強く出がちで、押しつけがましさやもの足りなさを感じるがよくあります。これに対し本の場合言葉にはファジィ性があるため、考えながらゆっくりと自分流に読み進むことが出来ます。むかし学生時代にある小説が映画化されました。私はその映画に誘われたとき、自分の描いているイメージが壊されそうで断わったことを思い出します。

また、読書は人間の心を育てるのに必要なものであり、そのため特に若い人たちに対しその大切さを多くの人々が説いているのを諸君もよく知っているでしょう。その有用性はいくら述べても言い尽くせないと思えます。

しかし、何よりも読書の魅力はその楽しさにあると私は思えます。その楽しさを思い出し、再度それを求めてみてはいかがでしょうか。幼いときだれにでも何度かねだって読んでもらい、空想しその楽しい世界に遊んだ宝物のような絵本や童話の本があったはずですが。勉強のためとか人から強制された本読みではなく、自ら読みたいと思う本を選び、著者の知識の中に入り、考え、想像を膨らませ、夢中になることが読書であると言いたいのです。それを可能にしてくれるのも、学生諸君のために選ばれた多くの良書がそろっている図書館です。是非一度書架の前に立ってみてください。素晴らしい知識をいっぱい詰めた本たちが語りかけてくるように感じるのではないのでしょうか。

読書感想文

文学

「十五少年漂流記」

(ジュール・ベルヌ著)

M1 幟立 晃

この本を読んで僕は、作者ジュール・ベルヌに興味を持ったので、少し調べてみました。1828年フランスに生まれ、ロアール川の河口にある「フェイドー島」で少年時代を送ったということです。彼は一生涯に約60冊ほどの小説をかきましたが、それはほとんどが冒険の旅行のおはなしだったということです。その旅行は地球のまんなかから、月の世界、北極、南極のあらゆるところにわたっているそうです。ジュール・ベルヌが「空想科学小説の祖」といわれ、「宇宙旅行ものがたりの父」と呼ばれるのも、このためです。ベルヌは一生涯カトリック信者だったそうです。その信仰は、科学的探究心とよく調和していたそうです。彼の著書はカトリック教会の推せん図書だったそうです。そんな彼も1905年に死んでしまいました。77歳のときです。

この本は、僕にとって、勇気とは何か？ 団結することとは何か？ ということを教えてくれたような気がします。それは、弟のジャックがロープを外して勝手に船を動かして漂流させたとき、嵐がきて15人の少年たちが力を合わせてその嵐をのりきったことや、ある無人島に漂流しても、くじけずに、その島で生活したことなどまだまだ教えられたことがたくさんあります。もし僕がこの話の主人公なら、多分生き残れずに死んでいたと思います。

この本は、主人公と仲間とのうらざりや団結することの大切さを多く書いています。そのことから、どんなたいへんなことでも15人の少年たちが力を合わせてすればできることが分かります。洞くつをほったり、何年か前までそこに住んでいて、結局助けがこずにその島で死んでしまった人の骨をみてもあきらめずにその島で生活しようとしたりと、僕がそのじょうきょう

なら、させつしてしまうようなことばかりです。

僕は、この本の作者“ジュール・ベルヌ”が何十年にもわたる人生の中で、空想の世界での話を60数冊も書きあらわしました、そんなことができたのは、作者の心の中には、冒険をしてみたいというゆめをもっていたんだらうと思います。

僕はこの“ジュール・ベルヌ”の他の小説ももっと読んでみたいと思いました。

「小僧の神様」

(志賀 直哉著)

E1 松川 貴徳

この文章を、まず見て気づいたことは、ずい分むずかしい漢字が使われていることだった。たとえば、「^あ或る」、「^{のれん}暖簾」、「^{まぐろ}鮪」などよく見られた。この物語の舞台は、東京が江戸という名からかわった明治中期である。主人公は仙吉という名で神田の秤屋に奉公している小僧ということが分かった。

まず店の番頭どうしの会話ではじまるが、その内容が鮪屋というところがおもしろいと思った。そして、その話を仙吉が聞いているのだが、口の中にたまっている唾を音のしないように用心して飲み込んだという表現が、小僧にはどうていそんなもの食べれないという気持ちと、番頭たちに気がねしていることがよくあらわされていた。それから仙吉はお使いに行くがその帰りの途中で鮪屋にひかれて、わずかな金を持って入って行くが、鮪を一つ、つかんだ瞬間店の主人の「1つ6銭だよ。」という言葉で自分が買えないことに気づいてはずかしく店を出ていったことがとてもよく感じられ、読者まではずかしくらいだった。そして、そこで登場人物の貴族院議員のAが見ていて、このかわいそうな小僧に同情するのだった。それからAがこの小僧になにか御馳走してやればよかったと思いがら秤屋へ秤を買いに行くと、偶然小僧を見つけ、わざわざ偽名を使ってまで小僧を鮪屋へ連れて行って御馳

走したことが、とても不思議に思えた。

しかし、小僧に御馳走してよいことをしたはずのAだが、変にさびしい気がしたとはじめ書いてあったのが、どうしてかよく分からなかった。だが後になってみると、Aが本当に良いことをしたのかどうか自分でまよっていたことが分かった。そして、Aが細君とそのことを話して最後「俺のような気の小さい人間は全く軽々しくそんなことをするもんじゃあ、ないよ。」と言った言葉に、何か気がひかれるような気がした。

一方、小僧の仙吉は、鮎屋で恥をかいたこと、番頭たちが話していた店のことなどを思い出して、これは変だと思いはじめていた。

そして、あの客は自分の心の中まで見透していたので、もしかしたら神様かもしれない。いや仙人かお稲荷様かもしれない、と考えていた。このあたりの仙吉の心理変化が、ぼくはとてもおもしろいと思った。そして仙吉は、悲しい時、苦しい時に「あの客」をおもって慰みにして、また恵みをもって自分の前にあらわれてくれると信じていた。

このように、いいことをしたAと、いいことをされた仙吉の2人の考えることが全く違う方向に進んでいたところが非常におかしな作品だった。

「ハックルベリィ・フィンの冒険」

(マーク・トウェイン著)

C1 敵本 紀子

この本は、マーク・トウェインによって書かれたもので、「トム・ソーヤーの冒険」の続きのようなものです。私は、冒険小説はわりと好きなので、この本を読むことに決め、はじめに「トム・ソーヤーの冒険」を読みました。本当に起こった事とは思えないようなものでしたが、とてもおもしろく、すぐに読み終えることができました。

続いて、この本を読みました。黒人のジムを自由にする事から、いろいろな展開になっていき、「次は何が起こるのだろうか？」という気持ちにさせられました。

それにしても、この頃は黒人は奴隷というのが当たり前で、その事が不思議に感じられました。いったい、

いつから、なぜ黒人より白人の方が身分がたかくなったのだろうか？ 値段をつけられ、売り買いされる—それが普通になっていた黒人を、私は何とも哀れなものだと思った。

この話の主人公であるハック・フィンの父親が、まあ世の中にこんな親がいるものか、と思うほどひどい父親だった。父親から逃げて始まった冒険だが、まさかその旅の途中で父の死体と出会っていたなんて、予想もしてなかった事だろう。だいたい話の最後はこうなる、という予想はしていたけれど、これは全く予想外の事でした。思わず、そういえば…と前の方のページを開いて読み返しました。

旅を続けていると、詐欺師といっしょに暮らす事になったり、難破船に上がってみたりしたけど、ハックとジムが離ればなれになって、ハックが人の家に住み始めた時は、このままだと話はどうなるのだろう、と考えた。でも、バック達が死んでしまった時、きっと再びジムに出会ったりするんだろう、と思った。

話の中に、鉄砲が時々でてくるんだけど、今、身近にそんな物があれば、きっと毎日たくさんの方が死んでいるだろうと思う。

「トム・ソーヤーの冒険」で、最後にトムとハックが大金持になったように、やっぱりクライマックスにはトムが必要、という感じでトムが登場してきた時、おもしろい終り方をするだろう、と思った。案の定、わけのわからない計画を立てて実行した。トムが脚を鉄砲でうたれた時、痛そうなのを想像してしまいました。

子供の頃に実際こんな事があれば、きっと一生の思い出になるだろうと思う。

私は、この話の終り方がなんとなく好きです。始まりは、ダグラス未亡人の養子にされる所からで、終りはサリー叔母さんが養子にしようとする所ですが、なんか始めに戻ったような感じがいいな、と思いました。

この話に、もし続きがあるとすれば、きっと読むだろうと思う。続きが読みたいくらい私はこの話が気に入りました。しかし、続きは、自分で考えることにしようと思う。

「モーツァルト」

(田辺 秀樹著)

A1 佐々木 愛

今年丁度、モーツァルト没後200年の年です。私は以前、テレビで映画「アマデウス」という題名でモーツァルトの物語が放映されているのを見て、何だかとても印象に残ったことを思い出し、立ち寄った本屋でこの本を手に入りました。

モーツァルト——、わずか5歳で作曲を始め、没後200年たった今もなお、その名を世界中に残し、多くの人々に愛され、天才と呼ぶに相応しい人物。私はピアノもヴァイオリンも弾けません。だから、両手で軽やかにピアノを弾いたり、ヴァイオリンが弾けたりする人のことが羨ましくてたまりません。モーツァルトという人物は、ピアノ曲だけでなく、ヴァイオリン、フルート、ホルン、クラリネットなどの楽器のための曲も多く作曲しています。彼にとって、音楽とは何だったのでしょうか。こんなにも簡単に操れるものなのでしょうか。音楽を一つのことだけにとらわれず、幅広く自由に表現できるなんて、とてもすばらしいことだと思います。

ウィーン・パリ・ロンドン、幼い頃から色々な場所を、父、レオポルドと共に音楽を学んだり演奏したりすることが多い中では、友達と仲良く遊んでいる暇など、とうていなかったことでしょう。しかし、そういう忙しさは彼の人柄を悪くしたりはしませんでした。彼は、お道化でふざけるのがとても大好きな人物だったようです。気の合う者と一緒に、駄洒落や語呂合わせを言ったり、行儀の悪いことをしてみたり…。

現在では、こんなにも有名で尊ばれるモーツァルトであるのに、彼の人生はいつまでも華やかなものではなかったようです。彼の作曲した交響曲、オペラなどの作品こそ人気はあったものの、経済的にはかなり苦しかったようです。32歳を過ぎた頃から、友人プフベルクに経済的援助を申し込むために、幾度か手紙を書いています。妻、コンスタンツェが病気になり、経済状態はますます悪化する一方で、モーツァルトは作曲を続けました。自分の生活の苦しさなど全く見られないような、幸福感や歓喜に満ちた作品から、一体どれ

だけの人が彼の本当の辛い立場を知ることが出来たでしょうか。

ウォルフガング・アマデウス・モーツァルトは、彼の最後の曲となった「レクイエム」を終わりまで自分の手で譜面につづることが出来ずに未完のまま、1791年12月5日午前零時55分、この世を去りました。

彼の葬儀は、35歳という若さで亡くなった天才にはあまりにも淋しく、無惨なものでした。現在も彼の遺骨は明らかにされていません。私は彼の気持ちを思うと、孤独な死に同情してしまいます。

モーツァルトは本当に死んでしまったのでしょうか。—いいえ、彼は、私達が彼の作品を愛し、心に思い出すことによって、いつの時代にもよみがえることが出来るのです。

倫社

不思議な人・ソクラテス

M2 桑田 克美

まず、本を読んで思ったことは私には意味がほとんどわからないということです。だからイメージもなにも思いうかばないというのが私の本当の感想なのですが。それでは終わらないので一生懸命考えてみました。そしてだしたイメージが“不思議な人・ソクラテス”です。

私にとってソクラテスは不思議な人です。私にはあんなに次から次へと言葉がでてこないし、質問もわからないです。それに自分で質問をだして自分で答えをだしている。やっぱり不思議な人です。ただのへりくつという感じもするのですが。でもそのソクラテスを言いかしたディオティーマという女性に感心しました。あのソクラテスをまかしたのですから。だからソクラテスとディオティーマとの会話はけっこうおもしろかったです。ソクラテスはいつものように質問をし、いままでの人はすぐに言葉につまっていたのに、ディオティーマは、てきぱきと答えてしまったからです。ソクラテスの上に行く人もいるんだなあとおもってしまいました。

私は最初からあまりソクラテスをよく思っていなかったので（あんな風に言葉が達者な人は苦手です。なにを話してもおしつぶされそうな気がするのです。）そこはおもしろくよめました。今の自分のまわりには、ソクラテスみたいに言葉の達者の人がいないのでよかったのですが、ちょっとみてみたいという気もします。今の時代でもやっぱり“変わり者”という部類に入ると思うからです。だから、あまり想像ができないし、好きになれそうもありません。でも、あんなに人をひきつけることができたのだから、よい所がたくさんあったのだと思います。だから、やっぱり私にとってソクラテスは不思議な人です。

〈参考：新潮社『饗宴』（森進一訳）〉

若く美しかったソクラテス

E 2 稲田 亮史

僕はソクラテスという人物をよりよく知るためにプラトンの対話篇『国家』全10巻を読みました。ソクラテスに対するイメージを述べる前に国家の内容を説明しておく、ソクラテスとケパロスという人物との談話から引き出された「正義とは何か」という問題について、とりわけ「正義」という言葉の持つ価値と根拠を疑い否定する思潮が存在するだけに、国家・教育・知識等の各内容を通してソクラテスが人々と議論し、説明していくという話です。

僕がこの対話篇を読む前に持っていたソクラテスに対する知識は、彼は無知であるということに自覚している人であるとか、彼も含めて人間にとって最も大切なことはただ生きることではなくよく生きることだと述べた人であるとか、知行合一の人物であるとかいったようなことです。実際にこの本を読んで感じたことは、プラトンが書いた作品であるにもかかわらず、まるでソクラテスが書いたように思える、ソクラテスのものであると主張できるといったようなことです。

僕はソクラテスという人物を非常にいい意味で頑固な人物だと思います。なぜなら自分の中で思っている最高の議論で人々と対話し、その議論を決して曲げることがないからです。しかし、頑固といっても彼が言っていることは、正しくて当を得ているので、非常に優れている人だなあと思いました。ソクラテスと自分

を比べてみると自分は非常にいいかげんな人間に思えてきました。いいかげんに思えてきたというのは、ソクラテスと比べて少なくとも哲学をする、すなわち真実の知恵を愛し求めるという大切な事については自分は大きく劣っていると感じたからです。知恵を愛する精神、哲学というものについて、あるいは彼が思っている正義に対する知識についてはソクラテスは誰にも負けない、誰にも劣らない人物であったと思います。彼のような人物が政治を行えば、とプラトンではありませんが、本当に国全体がよくなるのではないかと思います。でもこれは本当に理想で、現実にはそんなように哲学者が政治をしている国はありません。もしそんな国が現れたなら、その国は本当によくなると思います。

ソクラテスの像の写真等を岩根先生から見せてもらいました。ひげがもじゃもじゃで鼻が大きくてはっきりいって美しいとは言えません。しかし僕がこの国家を読んで感じて描いたソクラテスは本当の意味で若く美しかったソクラテスでした。見せかけで美しいとかいうことではなく、もっと深い意味でソクラテスは美しかったと僕は思いました。僕もソクラテスのようになりたいというだけでなれるとは思いませんが、彼のような人間を理想として少しでも彼に近づくよう勉強していきたいです。

〈参考：筑摩書房世界古典文学全集15

「プラトンⅡ」田中美知太郎編

P 5～P 291 「国家」全10巻〉

○「図書室では静粛に」

○「読んだ本はもとの位置へ」



○「貸出期間を守ろう」

○「図書室での飲食はやめよう」

受け身の達人・ソクラテス

C2 猫崎 覚

ぼくはソクラテスが嫌いです。この課題のために本を読んでさらに嫌いになった感があります。授業のときからただソクラテスがどうしてもただの偏屈じじいにしか見えないからです。人の上げ足をとるような事ばかり言うくせに自分は何も知らないからです。でも知らないことを知らないという「無知の知」はとても大切な事だとも思います。

前おきはこれぐらいにして読んだ本で気付いた所を拾っていこうと思います。まず一番驚いたところはソクラテスがディオティマという女性に会話で完全に主導権を握られていることです。つまり、ディオティマが一方的にソクラテスに説明調で話しかけているのに対しソクラテスが毎回、毎回肯定の答えを出しているのです。ソクラテスが彼女の矛盾を直すということができないでいるのです。これは珍しいと思って読み進んでみると、どうやらディオティマの話はソクラテスが「おかしい」と指摘できないらしいのです。ということは、やはり前述したようにソクラテスは人の上げ足をとれないとどうしようもできないようです。つまり相手の言っていることが正しいとソクラテスもうなづくしかないようなのです。このことからぼくはソクラテスはたいしたことないんじゃないか、と思うようになりました。

ところがよく読んでみると前文も適切な表現ではないと思ってきました。まずソクラテスは確かに矛盾を指摘できてはいないけれど、ソクラテス自身もまちがったようなことは言っていないからです。それから、ソクラテスが相手の考えを結構尊重というか大切にしているところも考えさせられました。相手の話をまず聞いて、自分をはじめて口を開き、質問をしたりする。と書くともまた嫌なイメージがわきでてくるようですが、ここでよく考えてみると、ソクラテスは聞き上手だったのではないのでしょうか。いや、聞き上手というより、受け身型の人間というのがあてはまると思います。ここでようやく副題がでてくるわけです。そういえばソクラテスは人の話を聞くだけ聞いて、あっさりひっくり返すという、受け身の達人なのではないのでしょうか。

または返し技の名手でもいいかもしれません。

最後に、先に書いたようにこの本を読んで更に嫌いになったところもあるけど、ぼく自身、受け身型なので、結構尊敬できるようなところがあるような気がします。

〈参考：岩波文庫『饗宴』プラトン著 久保 勉訳〉

生涯強情だった人・ソクラテス

A2 下井田 裕二

ソクラテスは強情な人だと思いました。授業で学んだ時よりはるかに強情なイメージを持ちました。僕だったら親友がせっかく脱獄をすすめているのなら、恥やみえを捨ててでも隣国や速くのポリスへ逃げているでしょう。誰だって一番この世で恐いものは「死」だと思います。その「死」がすぐ目の前に迫ってきてるのに逃げようもしないで、難しい議論をしようなどとはすごい根性です。たいしたものです。これを逆の見かたをすると「強情だ」というふうになります。

しかしソクラテスからしてみると、そうではないのでしょう。教科書風になりますが、ソクラテスはただあることに忠実に従って生きてただけなのです。死ぬまぎわまでそのようなことを忠実に守ってきたことは常人では考えることができません。

僕はこの本を読むまでソクラテスはただ昔の天才だとしか思っていませんでした。確かにソクラテスは当代随一の人とまで言われた人ですし、優秀な弟子も育てた天才です。しかしこの天才はただの天才ではなく、一歩まちがえれば「バカ」とよばれそうです。なぜなら自ら死を選んでいるからです。僕はこのソクラテスを変な人だなあと同時に、最後まで自分の信念をつらぬきたいだいな人だなあとも思っています。

もしこの世にソクラテスのような人が現れ、ソクラテスと同じような死に方をすれば皆はどう思うでしょうか。ある人は「バカな奴だ」と言い、またある人は「なんと勇気のある人だ」と言うでしょう。皆が自分の信念を死ぬ時まで貫き通すがこの世で何人いることでしょうか。たぶん僕は死ぬまぎわになると逃げ出すでしょう。これからはソクラテスのように強情な人になりたいと思います。

〈参考：『クリトン』新潮社 田中美知太郎訳〉

歴史

「2/26」を読んで

(笠原 和夫著)

C3 秋好 潤也

僕はこの本を読んで自分が情けなくなりました。決して2・26事件の将校の考え方が正しいというわけではありません。同じ位の年の人が自分の正しいと思ったことを一生懸命にやることができるというのがすばらしいと思うのです。僕には一生懸命になれるものが今のところありません。

この事件の青年将校達は、世直しのために立ち上がったということです。確かに貧しい下士官の家へ自分の給料の一部を送ったり、農村の解放運動に身を挺していたそうです。

しかし、この将校の人達は一直線にしか物事を考えられなかったのではないのでしょうか。「昭和維新」の名のもとに、政治と国策の失敗で貧困にあえぐ国民を救うために蹶起します。

しかしこの人達の考え方では決して愛国の心ではないと思うのです。天皇を絶対な権力として考え、天皇と軍が一緒になって国民を救う。確かに当時はそういう考えしか持てなかったのかもしれませんが。しかしそれではただの国粹主義となってしまいます。

将校の人達はほとんどが20代の人達でその人達の中には結婚2週間の人もいたということです。この人が死刑になる寸前どのようなことが頭を駆けめぐったのでしょうか。この坂井という将校は、結婚2週間目で奥さんは17歳だったそうです。僕と年の変わらぬ奥さ

—利用について (お願い)—

▶ <転貸禁止> ◀

最近、「貸出図書」や「利用票」の転貸による事故・トラブルが発生しています。

決して他人に貸与しないで下さい。貸与により事故が生じた場合は、利用票を交付されている者の責任となります。十分に留意して下さい。

んを残して理想のために立ちあがる。僕だったら絶対できません。

将校の人達の考え方はかたよりすぎていると思いますが、自分の考えに自信を持つことや理想を曲げないというのは見習うこともあるのではないかと思います。

そして2・26事件は、第2次世界大戦に導いた事件と言われています。

しかし、本当にそうなのでしょう。彼らは人間味あふれる庶民の側にたって考える人達だったそうです。決起部隊の兵達は将校の考えを疑わずについていったそうです。事件で殺された人達はむごいのですが、その流血よりも、貧しい人達の自殺などは、もっとむごいというのがこの人達の考えだということです。

この将校達が絶対正しいということはないと思います。しかし、この人達が本当に庶民のことを考えてのことならば、この人達を逆賊であるとし、奉勅命令を出し、戦後に神をやめて、象徴、人間になった方よりも、平和主義者だったのではないのでしょうか。

「物語・日本の土木史」を読んで

(長尾 義三著)

C3 岡田 和幸

「歴史」に関する本なら何でもよい、と聞いたので歴史の教科書では学べないものを、またこれからの自分にプラスになるような歴史の知識を得ようと、この本を選んだ。この本は、古代仁徳天皇の国づくりから始まり、現代の土木事業、土木工事に至るまで、その歴史の長さは日本という国の発展と共に歩んできた。それだけに様々なエピソード、ロマンが土木史の中には含まれている。今それらに触れてみて、土木工学の偉大さを改めて痛感させられたのも事実である。

“水”ほど人間の生存に不可欠なものはない。この水をうまくコントロールすることは、古代から、古今東西を問わず為政者の最大関心事であったという。水を治め、利用する。それは、人間の生活にはなくてはならない。この課題は、現代も同じである。その表れが上下水道、そして河川の工事である。古代では、仁徳天皇が当時の都である難波津周辺の大和川や淀川の河口を整理するため、大和川を分流させようとしたことが大規模治水工事の始まりという。今も昔も自然の

力とは、ある時は人間生活にとっては恵みとなるが、しかし、あるときは人間に襲いかかって命を奪う。それらの巨大な力を恐れたのは現代人も古代人も同じであると思う。これを制御するのが土木技術であるが、古代はその技術が未熟な為、うまく制御できなかったのが歴史であるように思える。だから人間は考え、土木技術を発展させてきたように思う。ここが人間の未知の能力であると思う。その結果が、現代の日本の姿であり、今日、我々が自然災害、特に水害などの生命の危険を恐れずにくらしていけるのは、古代から発展させてきたあらゆる人々の努力、犠牲の結果であると思う。

しかし「土木技術はあくまで自然の理の範囲にとどまる謙虚さが必要」とあるとおり、人間の力が進みすぎては逆に、自然の逆襲があることは忘れてはいけないことであると思う。その例は山腹の森林の破壊により、土砂くずれなど、そのような人間側の要因による災害もまた、古代から土木技術の発展と共に発覚していることを忘れてはならない。しかしそのような事実をも把握し「治水の根本は治山にある」と説いた熊沢蕃山(1619~1691)という人がいたのだから人間、賢いものである。

しかしこの華やかな土木技術の発展にも、古代では、国の封建制度の強大な権力が示されていた。当時は大型建設機械もないわけだから、当然人間が使われるのである。民衆を道具として使っている強大な権力の非人道的な支配が、土木史の中には含まれていると思う。その例が、古墳、宮殿、城郭、ピラミッドなど、それらには人間の悲しい運命があることを忘れてはならないと思う。でもそのおかげで土木技術が発展したのならやむを得ないと“土木技術発展の為の犠牲者”の一言で済ませるなら、自分も非人道的な人間であるかもしれない。

日本の土木建造物で有名なのが「城」である。城は、その土台石垣や、濠、盛土、築石など、現代の土木技術からでも驚嘆に値するものが数多くある。それらは、戦国時代自分の城を敵に占められると負けというルールの為、城主は、あらゆる土木技術を駆使し造ったと思われる。そうなると、あれだけ見事な城を造り、土木技術が発展したとなると、人間の窮地に立たされ、生きようとする信念が、そうさせたのかもしれないと思う。

そして明治に見られる、日本の文明開花。この時代は、鉄道、ダム、道路それらの技術は、外国に遅れをとっている日本国政府の“あせり”から発展したのかもしれないという。いわゆる“外国に追いつけ追い越せ”というスローガンと共に。そして戦争、終戦へと。日本の歴史というもの、波乱万丈である。それと共に人間の社会も何度となく変わっている現代の土木技術の発展は、日本国内の発展の為、例えば、新幹線(大量高速輸送)高層ビル(省スペース大量面積)高速道路など現代は国内産業発展などの目的で土木技術が発展しているのであって、決して、他の国から守ろう、自分の墓を大きくして権力を示そうという目的は、ひとつもないのと同じことであると思う。

そう考えてみると、土木技術の発展というものは、それぞれの人間のその時代のそれぞれの目的によって発展してきたと思う。だからその時代の土木構造物を見れば、その時代の社会の構造が手に取る様に分かると言っても過言ではなからう。今、この土木史を読んで、意外な人間社会の歴史の背景を知ることができた。今後人間の社会が変化すれば、それに応じた、土木技術が発展するであろう。現に次は、宇宙の支配に向けて、動きだしている様である。私の人生、土木技術の発展が良い方向へ向かって発展することを心から祈りたい次第である。

「落日燃ゆ」を読んで

(城山 三郎著)

A3 金子 明子

この本の主人公、広田弘毅の「自ら計らわぬ」という生き方は誰にも真似出来ないすごいものでした。広田は外交官になってからというもの、自分が取り組みたい中国問題は棚に上げておいて、任された仕事はきちんとやり遂げ、「自ら計らわぬ」生き方を思い込んだら徹底してやる性格だったのだと思います。「自ら計らわぬ」というだけあって、おとなしいだけかと思えば話をして分かってもらえない人間には、広田の得意な柔道で体ごとぶつかっていくという事もあり、そういう精神に力強さを感じました。

栄誉や恩賞と無縁でありたいという、その当時にしては珍しい広田の考えに私は驚きました。私だったら

自分のやりたい仕事をして、めんどろなことはなるべく避け、話をして分かってもらえない人間には話す気をなくし、褒美をやると言われたらすぐ手が出ると思っています。広田のように自分自身の出世より、国のため役に立とうとする人こそが、外交官という職務を立派に務めることが出来るのだと思います。

広田は麻雀をする事もあり、負けず嫌いで勝つまで止めようとしないう性格でした。しかし外交官として仕事を通し、すべてをお国に捧げようとしていた広田は、仕事以外の何物かに捕らえられたり溺れたりしてはならないと考え、そうした自分の性格にブレーキを掛ける事が出来るので、自分自身に厳しい人だったのだと思います。私もし負けず嫌いの性格だったら、自分自身に甘いどころか麻雀に溺れていると思います。

戦争防止に努めながら絞首刑を宣告された広田は、理想の外交官であった山座の「外交官は自分の行ったことで後の人に判断してもらう。それについて弁解めいたことはしないものだ」という教訓の通り、東京裁判で一切の自己弁護を行わなかった。従うまま死んでいった広田が、最後の最後まで「自ら計らわぬ」生き方を貫き通したことに、私は広田の勇ましさを感じました。

この本に書かれているのは官界という競争社会での出来事であり、私にとって大変難しかったので深く読み込むことが出来なかったけど、この本を読んで今までの自分の考え方を反省させられました。

「井上成美」を読んで

(阿川 弘之著)

A3 迫 真由美

私はこの本を読むために再び術科学校見学に足を運んだ。行く度に驚かされるのが、生徒の数々の遺書と見事な建物である。

山陽の山々が冬枯れを見せはじめた昭和17年11月10日、海軍兵学校を卒業してから33年目、52歳の井上成美は、第40代目の校長として、再び江田島の土を踏んだ。古鷹の山容は変わらず、懐旧の情が、井上成美の胸中を走ったことだろう。南方戦線から呼び戻され、教育機関長にすえられたのだがこの人事に納得できなかった井上は、嶋田繁太郎海軍大臣に“自分は精神家

でなければ人格者でもない。自由主義者でざっくばらんで人前をつくろうのが大嫌いで、高い所で聖人君子の道など説くのは全く性に合わない。世の中で教育者と呼ばれる人からはほど遠い人間である。なぜ自分を兵学校長にしたのか”と辞退を申し出したそうだ。しかし、これに対し嶋田は井上をおいて他に適任者はいないことを強調した。常に体制に反発し日米戦うべからずと主張し、果ては日本の敗戦までもを井上は口にしたそうだ。合理主義者である井上成美は戦闘でも猪突を嫌ったため勝算なしと判断すればあえて決戦を挑まなかった。そのため“戦闘下手”の烙印さえ押されたという。井上は連合艦隊司令長官の山本五十六にトラック島で「次の海軍兵学校校長は君だよ」といって見い出された。ともに体をはって日米開戦に反対してきた仲間である山本五十六のこの言葉は、戦局に勝利が残されない今、残された道は、敗戦後の日本を担う若者たちの育成しかないと井上は覚悟を決め、江田島の地にやってきたのだらうと思う。

軍人教育より社会人教育を、終戦目前の学校で実施しよう—これが、海軍兵学校就任を受諾したときからの井上の決意であった。

やれるか、やれないかではなく、するか、しないかであると、自らを追い込んだ—そんな井上の熱気に私は感動した。

彼が生徒図書館に『宮本武蔵』購入は認めても、『太閤記』の購入は認めなかったのは出世のために手段を選ばない生き方を排し、「おおらかで包容力があり、自分に勝てる人間」に生徒たちを育てたからだそうだ。

後に井上は教育局長高木惣吉に中央復帰を切り出されるが、井上はそれを強く断った。若者たちを思う井上の熱情は、江田島以外には注ぐ対象がなかったのだ

—利用について (お願い)—

▶〈返却期限〉を守って下さい◀

最近、貸出図書の期限超過が目立って多くなっています。殆どの図書が1冊しか所蔵していないものばかりです。お互いが有効に利用できるよう、期限までに返却して下さい。延長希望があれば、更新(2回まで)も出来ますので手続きして下さい。

ろうか。

たとえ終戦になり、江田島の若者たちが、そこを離れて散ってしまったとしても、井上成美の理想はひとりひとりに根づかせてみせるとの自負があった。この井上の至情は、若者たちに彼の自負のとおりたしかに生きつづけたようだ。その意味では、井上成美は希望を失いかけた若者たちに、人生の勝機をしっかりとつかみとらせたのであり、自らも勝機を逃さなかったと

いえよう。

昭和50年暮、井上成美元海軍大将が死んだ。戦後、清貧の生活を貫いたこの人こそ、敗戦前後、終戦工作に身命を賭した人だ。

開戦前、米内光政、山本五十六とともに日独伊三国軍事同盟に反対し、対米戦争回避を主張し、さめた知性と合理性を保ち続けた、井上成美こそ、“意志の人”といえるだろう。

随想・読書雑感

「蝕まれる地球」

(石 弘之著 朝日新聞社編)

C4 一本松 環樹

今日の地球は大気汚染・水質汚濁・砂漠化・空気中の二酸化炭素の増加・酸性雨などの様々な自然破壊が問題となっているが、これらの破壊は産業革命以後急速に増大している。その原因は何かを説明されているのがこの本で、感銘をうけた特に印象深い所を以下に紹介したい。

空気中の二酸化炭素の濃度が増加すると、地球の温度は上昇する。そうすると極致の水は融けて、水面は現在より高くなり、海の近くにある都市や町は水びたしになったりする。また現在赤道付近の地域ではやっているマラリア・デング熱などの病気が、日本などの温帯の地域にまでまん延する。二酸化炭素の増加の原因は、石炭や石油などの化石燃料を燃焼させることと、現在、熱帯地方でどんどん熱帯雨林が消えていっていることにもよる。

砂漠化は最も古い自然破壊といってもよいであろう。それは、人類が農耕を始めた約一万年前からされてきたものである。森林を焼き払いその残った灰を畑の肥料とするいわば、焼畑農業により砂漠化は急速に進行している。ただでさえ、雨が少ない地域に森林がなくなると、わずかな雨が降っても、地中深くまで沈降し、地表付近はからからになってしまう。そして、家畜を飼ったりすると、草などをかざられた場所でしか食べないし、かざられた範囲内でしか、行動をしないので、その場所は草の生えにくい土地になってしまう。そうすると人々はその土地を見捨てて、また別の土地へと

移り、そこでも同じことが繰り返され荒廃が進行する。現在では地球の陸地の1/3が乾燥した土地と言われている。この広い砂漠を人間の住みやすい土地にすることが、これからの課題ではなかるうか。

一方、水質汚濁は、石油を沢山使い始めた、今世紀から急速に進んでいる。特に石油による汚染がひどいのは、バルシャ湾である。この地域は、かつて、えびなどがたくさん捕れ、さんご礁が広がる美しい海であった。それが石油を外国に売って多大な金を得た代償として汚染された海となってしまった。

酸性雨、これは、スカンジナビア半島や北アメリカが大きな被害をうけている。酸性雨は森林を破壊したり、湖を一匹の魚もつれない死の湖に変えてしまった例もある。酸性雨の原因は、工場の排気ガスや車の排気ガスに含まれている、チッソ酸化物である。酸性雨の被害にあった、森林などには、ヘリコプターから石灰を散布して、中和させる対策がとられている。

その他、オゾン層の破壊も、重要な自然破壊であるが、その原因はただ一つだけである。それはスプレーに含まれているフロンガスである。フロンは地表では、全くの無害の気体である。オゾン層は生命に有害な紫外線を防ぐバリアの役目をしているので、これが破壊されると紫外線が強く地球に降り注ぎ皮膚がんの増大の原因となる。破壊の最も大きいのは、両極地であり、南極を調査していた人がひどい日焼けになったという例がある。

人類は開発をどんどん進めていき、そして、生活を豊かにしたが代償として自然を破壊し続けて来たが、自然は破壊されるとなかなか修理できない。これからの開発は自然破壊を極力少なくするような開発をしていかなければいけないと思った。

「1980—1990 POST MODERN AGE」

(新建築 1990年8月臨時増刊)

A 5 砂本 文彦

雑誌『新建築』は建築界における優れた建築、話題性のある建築を毎月掲載する情報誌であり、建築学科に籍を置く者は一度は手にしたことがあるのではないかと思う。ここで紹介するのは臨時増刊号として発売されたものである。

タイトルが示すように1980年代の建築界の動向を振り返ることを主な目的とし、1990年代を予測するための手引ともなる。内容は、年ごとの重要作品の写真と解説、そして1980年代における特記事項が掲載されている。難しく言えばそうなのだが、簡潔に言い表せば単なる写真集であり、作品解説も読み易く、全ページカラーでばらばらと手軽に読め、建築界の流れを大まかにつかみたい人にはお薦めである。

ところで、私が何故この本について触れるのかと言うと卒業研究の文献として利用しているためである。文献として必要なわけは『図書だより』には関係ないので割愛させてもらうが、その内容の一部を以下に示したいと思う。

東京都は国際都市東京として際立った数値を示している。東京周辺部の神奈川県、埼玉県、千葉県にも話題性のある建築が多く存在しているのがわかる。注目すべきは冬季五輪が開催される長野県である。軽井沢などのリゾート地を抱えているためとはいえ質の高い建築が数多く存在することには驚かされる。これに対して大都市名古屋がある愛知県に掲載された一作品もないことは、自治体あるいは投資家の文化意識の低さを示しているのだろう。

このように、雑誌を通していくつかのデータをまとめれば、建築の存在する地域性を理解できると思われる。

建築専門書というのは何かと訳の分からないことばかりずらずらと書いたものが多いのであるが、この本はあまり字を読むこともないので、文字嫌いの人にはもってこいの一冊といえよう。

〈1980年代を総括する数値的指標として4作品以上掲載された都道府県〉

都道府県	数	代表作
東京都	53	東京ドーム、東京都葛西臨海水族館、SPIRAL 他
長野県	14	飯田市美術博物館、小布施町並修景計画、田崎美術館他
神奈川県	12	藤沢市湘南台文化センター、横浜風の塔、横浜美術館他
大阪府	12	KIRIN PLAZA OSAKA、国立文楽劇場、電通大阪支社他
兵庫県	12	宝塚市庁舎、FISH DANSE、六甲の集合住宅、逆瀬台の家他
埼玉県	10	宮代町笠原小学校、盈進学園東野高等学校、進修館他
千葉県	5	国立歴史民俗博物館、日本コンベンションセンター他
栃木県	5	TOKYO AUTO、佐野市郷土資料館、二期倶楽部他
京都府	5	京都国立近代美術館、ライフ・イン京都、織陣、TIME'S 他
沖縄県	5	那覇市立城西小学校、フェスティバル、名護市庁舎他
北海道	4	サッポロビール北海道工場ゲストハウス、水の教会他
広島県	4	広島市現代美術館、安佐町農協町民センター他

新任教職員随想

(その1)

本校では、本年度4月以降新たに13名の教職員をお迎えました。そこで「図書だより」では、ご無理をお願いして、自己紹介、随想等の原稿をお寄せいただきました。25号と26号に分けて掲載の予定です。

時代と共に



機械工学科教授
辻 昭雄

「20年後には核融合が実現されるだろう」と予言されたのは、1955年に開かれた第1回原子力平和利用国際会議でのことでした。その頃から日本でも核融合の研究が始まりました。核融合は火花放電によって生ずる電子とイオンの集まりであるプラズマを磁場で閉じこめて、原子核が反応するときのエネルギーを取り出そうとするものです。究極のエネルギー源として研究されており、1989年に国立の研究所になった核科学研究所を中心として、巨大科学を形成しつつあります。

理論物理学も、従来の紙と鉛筆から、計算機シミュレーション手法が用いられるようになりました。2つの波がぶつかって、粒子がぶつかったときのように、もとの形を保って離れていくソリトンと呼ばれる波が計算機実験で示され、その後、非線形物理が大きく進展したことなどは大変強い印象を受けたものです。

私が始めて計算機を使ったのは1964年のことですが、HITAC-106という紙テープに小さな穴をあけるものでした。100行余りのプログラムでしたが、パラメータを変えた計算結果が次々に印字されてくるのに驚いたものです。次のTOSBAC-3400では、結果に納得できず、四苦八苦して計算機の誤りにたどり着いたことがありました。今は計算機が誤った計算をすることなど考えられないことですが、貴重な経験だったのかも知れません。大型計算機HITAC-8700は

1975年に導入されました。プログラムの1行分を1枚のカードに穿孔機で穴をあけて、1枚ずつ読み取らせるものでした。計算費も安くはなく、4千枚ぐらいのカードを持って、九大や名大の計算費のかからない所へ通ったものです。プログラムも記憶容量を少なくすることが重要課題でしたし、プログラムのカードは背の高さほどのカードケースに一杯ためこんでいました。その後、電話の受話器に音響カブラーをつないだり、専用回線を使ったりしました。

この度本校に赴任して、マイコンPC-9801を使うことになりました。前記の大型計算機の主記憶容量が1MBですから、性能はそれほど劣っていないと思っています。大学に1台しかなかった計算機を机のそばで、しかも専有できるのです。この小さな箱に実力を発揮させてやりたいと思っています。

昔も今も、何をどのように計算するかは人間が考えなければなりません。研究所などでは計算を外注でやらせるところもあります。計算することの価値は計算機の発達と共に低下するのかもしれませんが。人間が考えるのは、経験や勘によるのでしょうか、不思議なことです。多くのことがらを記憶していると言うのは脳の中がどのようにになっていることなのでしょう。また記憶を呼び出すのは何が起きているのでしょうか。人間の脳には、百億個ほどのニューロンと呼ばれる細胞があって、教育や内外の刺激によって互いのつながりを変化させて、良い脳を作り上げていくと言われていました。そのような働きをする簡単なモデルを作ることができます。そのモデルを計算機で調べることで、より、脳らしきものを作ることができます。

これまでプログラムを作るたびに、計算機に誤りを指摘され教えられてきましたので、こんどは計算機に人間を学習させる教師になってみたいものだと思っています。



「医用生体工学」への招待

機械工学科助手
森川 一



「みなさん。お元気ですか。」しばらく前のテレビコマーシャルで、あるタレントが云った言葉が流行になったことがある。言葉自体は日常会話に存在するだろうと云うこともない言葉なのに、その言葉を発したタレントの言い方が独特で、何故か流行ったと云うのが真相でしょう。「お元気ですか」と挨拶されて「ええ、お蔭様で」等と答えられれば良いが、「いやあ、最近体の調子が悪くてね」等となればあまりよろしいものではない。

あまり馴染みがないかも知れないが私の研究分野である「医用生体工学」は、「いやあ、最近体の調子が悪くてね」の人がお世話になる医歯学を工学技術で支え進歩させようとする研究分野です。そこで、この医用生体工学の概要と私がこれまで行ってきた研究のあらましを思い付くままに少し紹介してみようと思う。

「医用生体工学」というのは、生体（主として人間の体）を扱うための工学で、大きく分けて医歯学を助けるための工学応用分野と逆に生体に関する知識を応用して工学を発展させようとする分野の2つから成り立っています。医用生体工学で一番難しいことは、他の工学分野と違って対象とする物体が生体で、取り扱いが大変であるということです。この「取り扱いが大変」の原因は、生体の特性の殆どが非線形性を示し、それが複雑な相互関係を持っている為に、数学的記述が困難であること等に起因しています。

一番身近にこの研究分野の恩恵を受けるのは、病院にある各種の機器です。健康に過ごしていれば全く関係のないものですが、健康を害した人にとってには必要不可欠なものです。病院へ行くと数々の診断装置を用いて検査が行われるのは、周知の通りです。この様な医療用機器は医用生体工学無くしては存在し得ないに違いないのです。

私の医用生体工学との最初の出会いは、高専の卒研の時でした。医用生体工学に興味を持ちはじめた私は、今迄の機械工学の知識だけよりは電子工学の知識もあった方が多くの事を理解できると考え、大学の電子工学科へ編入学しました。幸いにも大学の卒研も、人間の感情（脳の生活ぶり）を測るPETという装置の数学的モデルを使った数値解析研究で生体工学に関係したものでした。更に大学院は生体工学専攻と云う医用生体工学を専門とするコースに進み、工学計測技術等を歯学の分野に展開する研究をしました。これは歯の矯正治療の期間が長く、治療費用もかかると云うことで、この負担を出来るだけ軽減し、効率的な治療を行う為に定量的な情報を計測により得て、歯科医師に的確な情報を与えようとするシステムの開発でした。

これまで工学分野はどんどん細分化して来ましたが、これからは今迄とは違って種々の分野が一緒になって色々な新しい技術を作り出すようになって行くでしょう。これから技術者になる学生諸君には自分が専門とする分野以外の多くの技術についても大いに興味を持って勉強してみたいと思います。じっくり勉強できる時期は今しかないのだから。

ちなみに本校図書館にも、医用生体工学に関する本が何冊かあるので、興味を持った人は図書館で探してみたい。興味は持てなくてもこういった変わった分野の研究もあるということくらいは覚えていても損はないと思うのだが、如何なものだろうか。

私がこれまで読んだ小説の中で、これはおもしろいぞという本を1つ紹介してみようと思う。その本は、スタニスワフ・レム著：完全な真空、国書刊行会です。レムは「ソラリス」等で有名になったポーランド生まれのSF作家で、この本は存在しない架空書物の書評という形式を取っており、中には16冊の書物の書評が書かれています。ただ唯一、この本「完全な真空」に書かれている書物で存在するのが「完全な真空」です。即ち、自分の書いた本の中で自分の書いた本自身の書評をしているという変わった本なのです。

図書館の中で……

機械工学科助手
岩本 英久



いま図書館にいます。いつもは学生が4、5人ぐらいいしかないはずなのに今日は特別のようです。テスト期間ということで学生たちが机を分捕って話に花を咲かせています。ここでは静粛が原則のはずなのですが、だれもうるさいことに文句をいいません。端からみると、勉強しているようには見えないのです。いやしていることはしているのでしょうかが本当に進んでいるのか不思議に思います。しかし、彼らはとても楽しそうです。どうやら、彼らはここに本を借りにきたのではなく、机と椅子と友人を借りに来たようです。でも彼らにとってはこれで充分なのです。わからないところは本で調べるよりも友人に聞いた方が早いのです。またそうすることでテストに対する彼らの共通理解というレベルで納得しているからです。それでも、これから家に帰ってからも集中して必ず復習することを私は望みます。また、疲れ果てても最後に残った力を振り絞って、いま蓄積された知識を小さい紙や文具にメモしてはいけないと思います。

そういえば、私も2年前の夏に受験勉強をするために図書館を利用しました。この受験は大学院に入るためのもので、自分の専攻する専門科目と外国語が試験科目でした。下宿や研究室にあるいつも目の当たりにしている机で勉強するより、やはり、クーラーの効いた図書館で多くの本に囲まれただけで自分が賢くなったのではないかと勘違いをし、いわゆる一つの自己暗示をかけて勉学に取り組むのです。するとなぜか集中できてどんどん勉強が進んでいくじゃありませんか。おかげで今の私が存在するわけです。大学院に合格できたのも、偏に私の努力の賜物であると心の中では思っているのですが、口に出しては言えません。やはり、あの清楚で落ちついた空間を提供して下さった図書館に感謝しております。と、ここでまとめる方が脈

絡からいって無難でしょう。

辺りを見回してみますと、当り前ではありますが、本がたくさんあることに気が付きます。百科辞典、雑誌、文庫本等いろいろ置いてあります。この学校を「呉高専」とせず「呉工専」と間違えて略してしまう人がいるほど、ここには工学系の専門書が豊富に揃っています。私はここに来て数カ月しか経っていませんが、何度となく足を運び助けを借りたものです。J I S規格もここで調べました。外国の文献も検索していただきました。図書館の利用の仕方は人々々です。学生の使い方、教職員の使い方、また各々の中でも違った利用方法があることでしょう。例えば、目の前にいる学生たちのテスト期間中での利用方法もその内の一つでありますし、暑い夏の日にクーラーを頼りにここで涼むのもよろしいでしょう。本にもいろいろあるように図書館にある机や椅子の使い方も十人十色なのです。

終わりに近づくに連れて学生の半分になりました。それでも花は散っていないようです。明日のテストはこれで本当に大丈夫なのでしょうか？

私は目の前にいる学生たちの前途幸あらんことと、ここがサロン化しないことを願います。しかし、本屋に入ったときや図書館で欲しい本を探しているとき、おしりの辺りがどこかしらムズムズとする感覚をおぼえがあるでしょう。あのときのおしりのときめきとでもいいでしょうか、そういった言葉では表せない期待もここにはたくさんあると思います。

空間系Hにおける、現象Pと 観測機能Kに関する問題

建築学科助手
間瀬 実郎



空間系Hにおける、ある点に現象Pが発生したとする。Hには、その空間的な性質を左右する条件Wがある。H上の任意の点Kにおいては、Pによる影響の強度がSとして観測されるが、SはWによって、時々刻々

変化する。

この場合、KがPから影響を受けることを問題とすると、その問題は、次うち何が原因であるか。

- ① PそのものがH内に存在すること
- ② WがもたらすHの性質
- ③ KがH内に存在し、それがPの影響を観測する機能を持っていること

Pの存在そのものに原因が有るとすれば、それは他のW、Kにはまったく非はないことになる。実際Pが存在しなければ、Kが空間系Hの如何なる位置にあっても、またKによる条件がどうであろうと、Sは恒に0になり、問題は発生しない。

一方、Kの存在に原因が有るとすることもできる。KがHの中に存在しない、もしくは、存在してもPの影響を感じ取る機能を持たないとすれば、Sは0になり、何も問題は起こらない。

この問題は、以上のようにPまたはKの存在のみに依存していれば、さほど難しいものではない。この問題を複雑にしているのは、Wによって、Hの性質が変化するところである。

Sの最大値を1、最小値を0とすると、Wによって、Sは1から0の値をもとりうる。Sが0のときは、KにおけるPの影響は、Pが存在しないと同等となる。そのためもしも、KにおけるPの影響の原因が、Pそのものに有ったとしても、Sの値が実質Wによって変化するのであれば、原因がWに有るようにも見える。実際、Kにおける観測をきわめて主観的にとらえて、恒にSが0であるようにWが固定されていれば、KはまったくPの影響を受けない。それどころか、Pの存在すらも認識しないことになるだろう。ところがWは時々刻々と変化するため、Kから見れば、どうしてもPによる影響はWが原因としてとらえられがちになる。このような原因の転嫁が、この問題を複雑にしている。

また、Kの機能も問題を複雑にする原因となっている。KにSを検出する機能がなければ、この問題は発生しない。上述においては、Kを単数で、一定した機能を持つものとしてきたが、Kが複数個存在し、しかもSを検出する機能に差があるとすれば、問題がまた複雑になる。例えばSを殆ど検出しない機能を持つK-g群と、Sを十分に検出機能持つK-m群が存在したとし、K-gに対してK-mの数が極端に少ないと

きには、この問題は存在があやしくなる。ごくわずかのK-mが感じ取るSの値は、問題の存在を証でこそあるが、問題の重大さにはつながらない。そうになると、この問題は、存在そのものが危ぶまれることになる。

以上のように、この問題にはWというフィルタがかかっていたり、Kの機能により問題の存在自身が微妙であるため、なかなか認識しにくくなっている。

しかしこの問題は明らかに存在する。だから、問題の原因をWに転嫁して、Pの存在を責めることを無意識のうちに避けたり、KがSを十分検出してしまうことから、原因を自己に向け、諦めへと進むべきではない。

この問題の原因は、やはり、空間系Hのあらゆる点に影響をもたらす、現象Pが存在することに他ならないはずである。そして、いかなるK-gにおいても、Sを検出する機能は皆無ではないはずである。したがって、すべてのKが、Sをしっかりと感じ取り、この問題を認識し、顕在化させる必要が十分にあると考えられる。

週休土曜日のツクツクボウシ



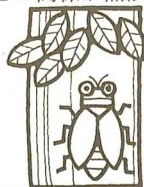
庶務課長
宮地 秀夫

9月に入っても今年の残暑は厳しい。週休土曜日の昼下がり、宿舍の庭で草取りをしていると、近所の子供達2~3人が庭に入ってきて蟬採りを始めた。しばらくすると“またツクツクボウシ”とつぶやきながら帰っていった。どうやらこの辺りの子供達にとってツクツクボウシはそれほど珍しくはないらしい。

山や川が近く庭木も多いせいか、弁天橋寄りの私の宿舍には、蟬のほか蝶やトンボもよくやってくる。とりわけツクツクボウシは京都育ちの私にとって魅力的なお客さんである。8月の初旬京都の妻と電話の最中、ツクツクボウシが庭にやってきて例の調子で鳴き出したときには、自分だけ楽しむのはもったいないと思い、

コードレス電話を精一杯木の上に近づけて妻にも聴いてもらうことにしたくらいである。また夜中に網戸を開いたとたん部屋の中に飛び込んでくるのがいて一瞬驚かされることがあるが、一夜明けて縁側近くに居るのを見つけて庭に放してやると、その小さな体を大空にぶつけるようにして元気に飛び立っていく。そういう朝は気分がスカッとする。

他にも単身赴任の宿舍生活で楽しいことがある。それは庭の樹木や草花である。とくに今年は赴任最初の年であるため、いつどんな花が咲くのかかわからない楽しさがあり大変興味深い。天気の良い休日に縁側に腰かけボンヤリ庭を眺めていると、自然と穏やかな気持ちになりまるで別世界にでもいるような気分になることがある。新旧交代を伴う大きな時代の変化を一時的に遮断して色々想像をめぐらしてみる。これは週休土曜日の効用で一種の安らぎを得るせいであろうか。そんな感慨にふけっている時、今まで木の上で大合唱していたツクツクボウシがピタリと鳴くのを止めたかと思うと、洗濯物の上に何回となくオシッコの舞うのが目に入ってきた。先程の瞑想の余韻が残っているせいか、オシッコの粒子群が霧散する有様は遠くの花火を見るように小宇宙を形成している。ツクツクボウシに誘われるようにして庭に出てみると、ふと茂みの中に紫色の小さな花がポツーンと咲いていた。いつも慌しく動いているときには全く気が付かなかっただけに、きっとツクツクボウシが教えてくれたのに違いないと思った。お陰で狭い庭がより広く見えるとともに、今度は庭全体が昆虫や草花などを包み込んで中宇宙のように思えてくるから不思議である。大いに満足して部屋に戻り、新聞を読んだりテレビを見たりしていると、ソビエト連邦のゴルバチョフ大統領とロシア共和国のエルツィン大統領の関係が報道されている。居ながらにして私の夢世界はより一層膨らんでいく。さしずめ私の宿舍は大宇宙といったところであろうか。もっとも一歩外に出て世間からその大宇宙をみれば、小宇宙に転じてしまうであろう。でもそうやって多重構造のような宇宙の存在を想像していくと、個と個・個と団体・団体と団体などの関係が無限の連続性と相関性を



もって認識されるのでおもしろい。ひょっとすると、私の世界観・宇宙観は週休土曜日によって少しずつ変わっていくかもしれない。いやぜひ変わってほしいものである。

そんな気持ちになれるのも、週休土曜日のツクツクボウシ様々である。来年4月以降には完全週休2日制(学校週5日制)に移行し、週休土曜日が月2回増えることになるようである。そうなれば、私は庭の花壇にチューリップの花を一杯咲かせ、より多くの宇宙を楽しむことになるかもしれない。

(注)「週休土曜日」とは、毎月の第二土曜日及び第四土曜日並びに人事院規則の定めるところによりこれらの土曜日と合わせて毎四週間につき二となるように各庁の長が職員ごとに指定するこれらの土曜日以外の土曜日をいう(給与法第14条第3項)。

放送番組の制作を通して



建築学科技官

柳田 純

私は高校時代の3年間、放送部で活動していました。特に興味深かったのは、全国で約2,000校が出場する放送コンクールに向けての作品づくりです。私が2年生の時に、ちょうど広島で「アウシュビッツ展」が開催され、収容所での遺品や当時の様子を伝える写真が展示されていたので、そこに訪れた人達にインタビューして、ラジオ番組を制作しました。ナチ・ドイツの時代にユダヤ人の受けた迫害について、音声を通して描いた番組です。

このような番組づくりの面白さは、「何をどのように伝えたらよいか」と考えながら番組をつくることにあります。何を伝えるかというのは、製作者の意図です。どのように伝えるかというのには、2つの手段があります。

1つは、「ラジオドラマ」(ラジオの番組)ともう1つは、「映像ドキュメンタリー」(テレビの番組)です。ラジオは耳で聴くものですので、テレビや映画に比べ

ると目に訴えるものがなく表現力に劣るように感じられますが、かえって表現が抽象的なので聴き手のイメージに限界がないという点で有利です。例えば、戦争や動物、スポーツ等をリアルに描くドラマは、迫力のある映像が適していますが、登場人物がわずかで、人物の心の動きを捕えて表現するには、ラジオ番組の方が適しています。

それで、私達の制作したアウシュビッツ収容所を取り上げたこの番組は、主に遺品や写真を見ての感想をインタビューするというものでしたので、ラジオ番組の構成で制作することにしました。それで、展示品を見ての感想を生々の声で聞き出す事ができ非常に良かったのですが、現物の遺品や写真をテレビのように番組の中で写し出して見せる事ができませんので、どのようにしたら当時の悲惨さや残酷さを聴き手に伝える事ができるかについて、夜遅くまで話し合ったりしました。

このような番組づくりの中で私自身は、ナレーターもしていました。どのようにナレーションをするのか

は、顧問の先生の所に通って勉強しました。例えば、大した事ではないと思える事ですが、「10分間」と読む時、「じゅっぶん」と読むと、マイクに音がきれいに入らないので「じっぶん」と読む事や、「1日」と読む時、「いちんち」と読みがちですが、ていねいに「いちにち」と読む習慣を身に付けるよう教えられました。又、呼吸法についても学びました。

このように部員の1人1人が番組を制作する中で、録音、インタビュー、編集の技術などそれぞれの役割について真剣に努力した結果、全国大会に出場する事ができました。

この経験を通して、今までは一般のラジオ番組を聞いても、あまり気に留めていませんでしたが、10分程度の短い番組でも多くの人の苦労や努力があることを知る事ができました。又、自分自身が番組づくりに協力してみて、ものを作ることに関心が非常に高まり、今までの見方が大きく変化し、物事に費された影の努力の部分をも見るようになったのではないかと思います。

私の推薦する本

水上 勉著

閑話一滴

(PHP研究所)

一般科目 非常勤講師 中村 一三

私の母は若い頃から村小使をやっていて「歩きさん」と言われていた。私の家には、村内63戸のうちただ1軒だけ電灯がつかなかった。「灯明代13銭」から始る著者の人生の旅路での思い出を語る。随想37篇。

中村 ^{ユタカ}裕博士は、日本で始めて個人の力で、重症障害者の自立工場「太陽の家」を創立し、企業として成り立たせた。この“仁”の人は、外科医にありがちな手術を受ける患者がもっている厄介な病気に既に感染していた。中村博士はそのことを友人の著者にさえ秘めていた。「ある外科医の死」。

昔若狭地方の農家の娘が田のある農家へ嫁ぐとき、荷物に加えて持参した苗木「ハンの木」は田の畔に植え刈り取った稲を乾かす稲架用にする。また、老後一自分の死体を焼くとき焼き損じないように、生でもよ

く燃える木だという。「ある手紙」。

京都の真如堂の桜の老巨木が台風によって根元から吹き倒された。その桜の“皮”の1部分が、根から突き立ったように残っていた。その薄っぺらな皮に佐野さんは山桜の苗木を接いだ。苗木は活着して年が過ぎるうちに枝を張り出し、訪う人も稀れなこの寺に、小粒の淋しげな花を咲かせた。「奇妙な桜」。――

著者の生家は極貧の小作農家。9歳のとき家を出された。特に寺小僧の数期間は、想像を絶する苦難と逆境(別著「水上 勉による水上 勉」に詳述)のうちに、人となった情であろうか、生命あるものがそれぞれ精一杯に生きている姿に、強く心を惹かれる。その感動(涙)こそ著者自身の旅の道しるべ、心の灯明となったであろう。それはまた(読者に)“人生いかに生くべきか”を問いかけているようにも思える。

石ノ森章太郎著

「マンガ青函トンネル」

(日本放送出版協会)

土木工学科技官 加藤 省二

世の中マンガ天国である。今や完全に庶民権を得、活字ばかりの文庫本を隅の方においやり、マンガは老若男女、年齢を問わず幅広い人々に絶大な人気を誇り、親しまれている。もはやマンガは立派な文化である。

数年前からだろうか、「経済」や「法律」、「株式」などのような分野の本は、興味があっても活字ばかりの本であると、今一つ敬遠されがちなものだったが、時代に反映してか、この手の本がひとたびマンガ化されると、世の人々にバカ受けしているのである。非常に分り易く、なにより読みやすいのである。マンガ信者である現代人にすんなり受け入れられるのも自然なことだと思える。もっともマンガという手段がとられる意図はそこにあるのだろうか。私はこういうたぐいのマンガ本を否定はしない。むしろ学生さんには是非お薦めしたい。

前置が長くなったが、本書の内容にふれたいと思う。本書は先に述べた一連のそうしたマンガ化された本の一つで、著者はいわずと知れた石ノ森章太郎氏である。この本には原作があり、著者は本書と併読されることを希望している。話の舞台を津軽海峡に置き、一人の青函トンネル調査員を主人公とし、工事前の地質調査から工事着行、貫通までをマンガの利点を活かし、ドラマチックにしかもかなり専門的に詳しく描かれている。

もともと（昭和20年頃）本州と北海道を一本の道でつなぐ計画もあるにはあったらしいのだが、現存の青函トンネルとは少しくる意味が違っていった。その計画によると、青函トンネルは東京～ロンドン間をつなぐ鉄道の通過区間にしかすぎなかつたのである。なんと壮大で途方もない話か。正確に言えば、「計画」ではなく、当時の鉄道省の人達の「想定」にすぎないのだが……。これらは常識的にみると、現実離れたおとぎ話にすぎないのだが、土木技術者の前では本書の言葉を拝借すると「男のロマン」となるのである。もっとも今となっては、ジャンボジェットの台頭により、そのような鉄道の必要性は皆無に等しい。土木の専門

をいくら学んでも、こうした工事の裏側までは伝わってくることはない。しからば我々はこうした本により、知ることができる。いっそう視野を広げ学ぶことができることになる。

鈴木博之ほか監修

「建築20世紀 Part 1・Part 2」

(新建築社)

建築学科教官 篠部 裕

「建築20世紀 PART 1・PART 2」が今年の1月と6月に新建築社からそれぞれ刊行された。この本は、「新建築」という建築雑誌の創刊65周年を記念して臨時増刊された記念号である。新建築は周知のごとく、わが国の建築ジャーナリズムを代表する新建築社から出されている雑誌で、建築関係の雑誌の中では最もメジャーな雑誌の1つである。

ところで、20世紀も残るところ後10年を切った。時代は正に世紀末の中のまったただ中にある。世紀末という言葉は、「時代が次の時代にシフトして行く為の大きなエポック」、「古きものと新しきものが互いに混在する混沌とした時代」を説明するに用いられている。

「新しい時代に向けて何をすべきか」という事を考える上で、これまでの時代の流れ、つまり歴史を再読する事は極めて重要なことである。

思えば20世紀の日本の建築の歴史は、「西欧化」と「近代化」であった。この2つの動き（流れ）を理解するためには、当然の事ながら20世紀の世界の建築の流れを理解する必要がある。本書は20世紀の建築の歴史をまとめたのであり、20世紀の建築カタログ集とも言えるであろう。加えて、日本（人）からみた世界の建築の流れ、日本の建築を再読する上で、21世紀の建築の方向性を探る上で、建築を志す者にとって本書は必読雑誌とも言えよう。

この本は各5,150円と少し値段もはるが、その値段の価値は十分にある。むしろ、たくさんのカラー写真を用いた専門書としては格安とも言える。

21世紀を目指して建築を学ぶ学生にとって、1年間、1カ月当たり1,000円弱の小遣いを投じる価値が、この本には十分ある。購読をお薦めしたい。

新 着 図 書 30 選

〈人文・社会〉

◆ジャン・ジオノ原作 フレデリック・バック絵

「木を植えた男」(あすなろ書房)

荒れ果てた大地に、ひとり黙々と木を植える男。彼は人々に豊かで、平和な生活をとりもどすことができた。自然を破壊し続ける今日の私たちに警鐘を鳴らすこの絵本は現代人必読の書であろう。(大林記)

◆和田春樹著

「開国一日露国境交渉―」(日本放送出版協会)

クリル諸島(千島列島)の国境を画定し、開国を決めた1855年の日露通好条約締結にむけた1年半に及ぶ交渉過程を新史料を加えてたどる。直前のペリーの威圧的な開国要求と異なるプチャーチンの辛抱強い、平和的な態度等をロシア史のコンテクストの中に置き、18・19世紀の日露接触、日本人のロシア観、敵として、隣人として、先生としてみなしてきた歴史を加えて、日ソ関係の原点をふりかえる。(宇根記)

◆谷山鉄郎著

「地球環境保全概論」(東大出版会)

文明の進展に伴って、化石燃料の使用は増大し、これが原因で地球の温暖化、酸性雨などの環境問題を引起こしている。また、熱帯林の減少、地球の砂漠化、海洋汚染も拡大の一途をたどっている。

本書はこれらの地球規模の環境問題について、経年データを多用しながら考察し、21世紀に向かう我々の生き方について考えさせてくれる。工学に携わる者として、別方向からの教養を深めて欲しいと願っている。(藤井記)

◆竹内直一著

「日本の消費者はなぜ怒らないのか」(三一書房)

勇ましいタイトルに、つい曳かれて手に取ってみました。

農林水産省の役人を辞めて、消費者運動を続ける著者が、日本消費者連盟の機関誌に1984年から食料問題を中心に連載文を寄せています。その中から約百編を選んで編集されたのがこの本です。私たちが知らない、食料問題に絡んだ農林行政の裏話等がたくさん紹介されており、非常に興味深い。(岡本記)

〈自然〉

◆武田祐治著

「演習中心 スグ解ける物理計算法」(三省堂)

高校物理の参考書・問題集は、基礎用から受験用まで数多く出版されているが、この本は標準的レベルの問題集と思われる。本校2年終了時において、マスターしておいて欲しいと考えている必要かつ十分な内容である。標準的な問題が精選され、NHK学校放送も担当している著者が全問題を明快に解いている。従って、解けない問題があった場合には本書を参考することによって、その多くが解決するものと思う。(笠松記)

◆塩田三千夫、福岡久雄共著

「有機化学概論」(裳華房)

有機化学を理解するための基本である、構造式の意味、化学結合の考え方、分子の形に関する基礎知識がていねいに解説されている。主要な化合物と反応が官能基の立場から分類、整理され、反応機構の基礎をわかりやすく説明してある。又、興味ある話題を取り上げ日常生活とのかかわりも考えられている。(小山記)

◆藪下信著

「計量的物理Ⅰ、Ⅱ」(地人書館)

コンピュータで宇宙の謎が解けるのだろうか。どんな謎が解けるのだろうか。研究者と言うのはどんなことを考えているのだろうか。計算機を使うのにどんな計算手法を修得しておけばいいのだろうか。自分の専門分野で役に立つのは何だろう。そんな問いかけをしながら読めるところを読んで下さい。(辻記)

◆小池慎一著

「Mathematica 数式処理入門」(技術評論社)

パソコンで因数分解、式の整理、微分、積分などの数式計算ができればと誰しも一度は思ったことがあるだろう。この本では、それを実現したMacintoshというパソコン上で動く数式処理システムMathematicaの使い方について具体例をあげてわかりやすく解説している。大抵の問題をMathematicaを使って解くには、これだけを読むだけでも十分である。又、数式処理で現在どのようなことができるかを知りたい人にも一読

に値する。(藤田記)

◆有馬哲、石村貞夫著

「多変量解析のはなし」(東京図書)

数式の多いちょっと難しい本だけど、性格を聞いて血液型をあてたり、お酒の好みで女子大生を分類したりと親しみやすい例で説明してあるからわかりやすい。統計の知識がない人は適当に読み飛ばしても結構。それでも何となく多変量解析を理解した気になると思う。

(西名記)

〈機 械〉

◆日本材料学会編

「X線材料強度学」(養賢堂)

本書は材料の構造とその機械的強度をX線回折法により解明したものである。なお、実験法としては、X線応力測定法、集合組織測定法、回折強度曲線の解析、細束X線回折、X線トポグラフィ、電子顕微鏡等があり、それらの作動原理や特性について解説されており、材料学を学ぶ学生にとって有益な指導書である。(灘野記)

◆日本航空技術協会編

「カラー図解ヘリコプタ入門」(日本航空技術協会)

ヘリコプタに関する空気力学を理解し易い図解で解説しており、ヘリコプタとはどんなものか興味を持つ技術者のための入門書であろう。なお、本書の内容は空気力学の概要、ブレードとローター、ローター揚力のコントロール、ローターの反作用トルク、ヘリコプタの飛行と必要な馬力等から構成されている。(灘野記)

◆松井信行著

「アクチュエータ入門」(オーム社)

アクチュエータとは、ロボットや工作機械などを実際に駆動させるものである。いま、ロボットを例にとると、ロボットの上下動や旋回あるいはアームを伸縮動させる動力源をアクチュエータという。このメカトロニクス的心脏ともいべきアクチュエータについて原理や応用の仕方を解説している。(野原記)

◆本田重夫著

「Macintosh Hyper Talk」(誠文堂新光社)

DOSマシンが全盛の日本でも、近年、すばらしい操作環境や充実したソフトウェアを有するMacのユーザーが、急激に増加しつつあることは皆さんよくご存じでしょう。

本書は、Macのバイブル的ソフトともいべき「Hyper Card」を操作するための言語である「Hyper Talk」について解説したもので、楽しみながらオブジェクト指向の言語をマスターできるようになっている。「Hyper Card」は、最近2.0にバージョンアップされ、大幅にその機能を強化したが、「Hyper Talk」のエッセンスを知る上では、本書で充分であろう。(赤尾記)

◆吉本久泰著(オーム社)

「メカトロ・シーケンス制御PC活用マニュアル」

本書は、シーケンス制御とプログラマブル・コントローラ(PC)の入門基礎解説書であり、基礎編、応用編、入出力機器編の3編から構成されている。応用編では、数多くの例題をとりあげて解説してある。これらの例題は、実業務において、“ヒント”として活用できるであろう。(岡部記)

〈電 気〉

◆山川正光著

「おもしろい電池のはなし」(日刊工業新聞社)

電池は私達の日常生活に溶け込んで利用されている。発明以来多くの研究者によって、改良、工夫がなされ現在のような、多種多様な高性能電池が生まれました。

中には海水電池、熱電池といった聞き馴れない電池もあります。本書は、いろいろな電池の原理、特徴、使い方をやさしく解説しています。(奥本記)

—利用について(お願い)—

▶〈転貸禁止〉◀

最近、「貸出図書」や「利用票」の転貸による事故・トラブルが発生しています。

決して他人に貸与しないで下さい。貸与により事故が生じた場合は、利用票を交付されている者の責任となります。十分に留意して下さい。

◆千葉則茂著

「コンピュータアルゴリズム全科」(啓学出版)

プログラミングを行う際にその全体の流れを決定するアルゴリズムは非常に大切なものである。不適切なアルゴリズムではプログラム自身の無駄な部分、或いは実行時に無駄な処理時間が長くなる。本書ではアルゴリズムの組立の基礎となる部分の例を述べている。

(横瀬記)

◆川上峻史著

「C言語とグラフィックドライバ」(工学図書)

C言語自身を理解した上で、MS-Dosのもとで動作するC言語によるグラフィックス・プログラミングの基本的な関数の作り方をわかりやすい実例をあげて詳細に説明している。(横瀬記)

◆坂本文著

「UNIX ツール・ガイドブック」(共立出版)

UNIX システムの最も基本的な部分を理解した上で更に UNIX について理解を深めたい方や、UNIX システムを生かしたワークステーションの使用をしたい方のために、UNIX システム V の代表的なコマンドの使い方、使用上の注意事項などがまとめられています。

(横瀬記)



〈土 木〉

◆Niels J. Gimsing 著

「吊形式橋梁」(建設図書)

吊橋、斜張橋について専門技術者向きにまとめてあります。従って学生にはレベルが高いので理解困難なところが多いと思いますが、数多くの写真があるのでこれらの写真をみるだけでも土木技術・橋梁技術に対する興味や関心が深まると思います。(丸上記)

◆谷本親伯著

「NATM [1]」(森北出版)

日本のトンネル掘削の施工技術は世界有数と言われその評価も高い。トンネル掘削技術でNATM工法は今日よく用いられる。新しい技術である情報化施工を取入れた信頼性のある工法である。この著書は基礎から丁寧に書かれ初心者にも理解しやすい。(小堀記)

◆内嶋善兵衛編(岩波書店)

「地球環境の危機—研究の現状と課題—」

この本は雑誌〈科学〉に掲載された地球温暖化、酸性雨、気候変動、土壌問題、熱帯雨林・種の絶滅、原子力発電といった地球環境に関する論文43本を編集したものである。調査データを基に解説してあるため真実味がある。たまに数式があり、その一部は低学年では習わない数学が使われているが、読み飛ばしても十分理解できる。

地球環境問題は副題のとおり、その実態を明らかにするのが現時点では精一杯であり、対策については述べられていない。ただ問題の解決には多種の分野からのアプローチが必要なことは確かであり、学生諸君が今学んでいる基礎工学と独創的な発想が要求されている。この本は地球環境問題を考える人にとって、欠かせない一冊と思われる。(大橋記)

〈建 築〉

◆W. W. Atkin 著(グラフィック社)

「建築プレゼンテーションテクニック」

建築の図面表現についてまとめた本。自分の考えを視覚的にいかに表現するかが図面作成にとって大きなポイントとなる。材料の選択と表現のノウハウをたくさんの図面を使って、分かりやすく説明してくれる。

(篠部記)

◆梶野工房著

「高感度住宅実例集」(永岡書店)

高感度という言葉に魅かれて借り出してみたが、高感度とは高品位と同意であった。写真を豊富に使い、レベルの高い住宅、大規模住宅、工夫の多い住宅を多数紹介しており、ページをくりながら自分がオーナーになったような、あるいは自分が設計したような気分とさせてくれる、気楽な写真集、図集である。住宅に興味のある学生なら他学科の学生も楽しめるはず。(藤井記)

◆中川武編

「日本建築みどころ事典」(東京堂出版)

この本は、書名からもその内容が想像できるように、日本建築のデータ集の役割と、ガイドブック的役割を兼ね備えた事典です。

日本建築史を学んでいく際に、個々の建築物についてもっと詳しく知りたいと思った時に、ひもといてみればきっと役に立つ本だと思います。(岡本記)

◆白石直典著

「中国地方の西洋館」(中国新聞社)

著者自身が直接、撮られた美しいカラー写真と一緒に、一つ一つの建物にコメントを添えて「中国地方の西洋館」が約160棟、紹介されています。

著者は、各地の近代建築が次々と姿を消していく状況を憂え、今、やらなければ出来ないかも知れないという強い焦燥にかられて行動され、さらにそれらの文化的価値を評価され、保存を強く訴えたい気持ちをこの本に託されたものと思います。(岡本記)

◆建築慣用語研究会編

「建築カタカナ語・略語辞典」(井上書院)

一応辞典だから最初から最後まで読むわけにはいかないけれども、ちょっとしたことを調べるのにはとっても便利。特に建築のデザイン関係の本なんかに出てくる得体の知れない外来語とか簡単に引けるので、難しい本を読むときに側に置いとくと重宝すると思うよ。(西名記)

<共通>

◆松島駿二郎編集・執筆 秋山忠右撮影

「空撮 大東京」(昭文社)

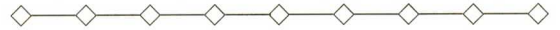
我々がふだん見る都市の姿とは、地上約1.5~1.8m(視点)からの姿であり、断片的な都市像である。

都市を一望するには空から眺めるのが手っとり早い。陳腐な都市も空から見れば、そのスケール感から雄大にも見え、新しい姿が見えてくる。大東京もしかり。(篠部記)

◆佐野敬彦編(学習研究社)

「ミラノ・イタリアンデザインの創造」

デザイン大国イタリアの中心を担う都市がミラノ。ポスト・モダンのデザインに大きな影響を及ぼす、イタリアン・アール・デコ。本書は、イタリアの1920年代~50年代にかけての装飾美術を紹介してくれる。(篠部記)



◎ <購入希望図書> 備え付け◎

図書館では、皆様から購入希望のありました下記の図書を受け入れ、備え付けました。ご利用下さい。

青木 慧：欠陥情報化社会(新日本出版社)

青木 慧：IBM欠陥パソコン(新日本出版社)

池田勝〔ほか〕：レクリエーションの基礎理論

(杏林書院)

遠藤 紀勝：仮面(社会理想社)

岡倉 登志：「野蠻」の発見(講談社)

小野田猛史：「環境の限界」は技術を超える

(東洋経済新報社)

小野田猛史：新軍縮時代がやってくる(農文協)

さくらももこ：もものかんづめ(集英社)

鈴木 旭：日本超古代王朝の謎(日本文芸社)

高橋 英一：生命にとって塩とは何か(農文協)

高橋 英一：ケイ酸植物とは石灰植物(農文協)

田代 洋一：だれのためのコメ自由化か(大月書店)

陳 舜 臣：諸葛孔明 上・下(中央公論社)

角田 房子：甘粕大尉(中央公論社)

角田 房子：閔妃暗殺 朝鮮王朝末期の国母(新潮社)

角田 房子：わが祖国 禹博士の運命の種(新潮社)

三田 誠広：いちご同盟(河出書房新社)

海外だより

拝会—経済部中小企業処

— 4月27日のメモより—

校長 片島 三朗

執筆依頼の記事区分欄は、海外だよりがマルで囲んである。ハワイにしようか、アメリカか韓国か。イヤイヤ“高専だより31号”の拙文をご覧になった委員の御指名に違いない。ならば再び台湾の話にしよう。しかし前の記事に重複しないように……と考えると本文となった次第である。

4月22日(星期一:月曜日)に広島—福岡—台北—高雄とたどり、以来26日までに講演1会場、工場指導2社をすまして今日は6日目星期六(土曜日)で、今日の予定は「拝会—経済部中小企業処」となっている。処長とお逢いした後孫文記念館、故宮博物院を見学した息抜きの1日。メモに従って私の一日を述べよう。

0630 起床。外は曇。台北は華華飯店1010号室。右下に見える4階建アパートの屋上では、スラリとした少女が一心に柔軟体操。体の線が美しい。一刻して見ると今度は屋上を歩き廻りながらノートを抜けて読んでいる。高校生？

0750 スーツを着用に及んでロビーに。呉、陳両氏(金属工業発展中心研究員)、楊(逢甲大学副教授)、

顔(中央大学副教授)両博士が揃ったところで、ホテルの朝食よりもと街へ出る。蛋餅、焼餅油条や葱油餅を何枚かずつ皿にとり、各人ドンブリ一杯ずつの鹹豆浆をすすりながら好きなものをたべる。メリケン粉を



といて焼き、半分にしたんでうすい卵焼きで包んだ蛋餅(タンピン)がうまい。

0900 省政府に近いビルの8Fに中小企業処長王覚民氏を訪問、呉科長も同席する。

王氏:台湾中小企業の強化に努力している。皆で努めれば工場設備の充実は可能であろうが、その運営が問題だ。日本の鑄造業界の動向は?台湾鑄造業界の進むべき方向を教えてください……。

約30分で辞去



(左から2人目筆者、3人目王氏)

0950 孫文記念館。中国革命の指導者、三民主義の提唱者で国父と仰がれる孫文を祀る。境内の木陰でダンスする人、見る人々。健康歩道としてグリ石をピシッリ固定した道を、小学生の団がズック靴を片手に危い足取りでやってくる。足裏の刺激が健康によいと奨められたが、筆者は2m歩いて悲鳴をあげた。

記念館正面玄関前の大きな池には、噴水が高く低く噴きあげ、しぶきは風に流されている。巾広い石段を20段も登ると広いホールに孫文の椅子座像。常人の3倍大



もあろうか。その左右を2人の兵士が鉄兜に着剣の小銃を構えて身じろぎもせず警備している。と、どこからか、ダッダッとゆっくりした重い足音。1人の将校に導かれた2人の兵士が出現。衛兵の交替だ。新・旧衛兵の間で敬礼の交換と銃を様々に操ってのセレモニー約10分の後、また、ダッダッと退去。



館内には孫文に関する各種資料が展示してある。世界を股にかけての新生中国誕生への努力のあとも生々しい。現在にも通ずる

世界潮流浩浩蕩蕩

順之則昌逆之則亡 孫文題

の額にうなづきつつ館を出る。出口に「請随手関門」とあった。手で門をしめて下さいの意。

1105 記念館横の街角。楊氏の車を待つ。軒先へぶら下げた家鴨の列に陽が当たる。ペキンダックの素材で



ある。白といってもよい黄色味を帯びたピンク色の鳥肌地。腹があけてあり、肛門から血のまじった滴がたれているものもある。陽が当たって腐りはしないかと心配したが、水気が切れるのを待つだけですぐ次の工程に入る由。ここで顔氏と分かれ、楊氏と士林地区の故宫博物院へ向う。

大きな書店。入口に「貧者因書富 富者因書貴」と本の効能書きがある。あちこちの本屋でよく見掛ける。また広場に中古自動車を沢山おいて「汽車買賣」とあったが、「賣買」ではないかと自動車を運転する楊氏に質したが、あれでよいという??

1143 自強隧道を経て故宫博物院着。まず飲茶で昼食。ㇿ焼包、咖哩餃、芋頭餅とお茶。

故宫博物院は中国の北京と台湾の台北にある美術館。清朝宮廷秘蔵の古美術品を展示する。中国のものは1925年一般公開され、台湾のものは日中戦争後国民政府の手でおもなものが台北に運ばれ、同名の美術館となった。筆者は両方を見ているが、建物、獅子などの遺構は北京、文物類は台北がすぐれている。ここ台北の収蔵品は、器物58,273件、図書文献部份30,013件をはじめ、総計620,250件。1ヶ月ごとに取換えて全部展示し終るのに12年を要するというところから、いかに龐大な質と量か想像できよう。

ここに同院発行「国立故宫博物院藏品選目」から写真3葉を借りてこよう。説明はキャプションに譲るが、図1では新鮮な白菜にとりついたバッタの後脚のトゲトゲまであきらかであり、図2では象牙塊から21層の球状シェルを抉って造りだした技法と腕前には脱帽の外なく、訪問の度に必ず見ることにしている。



図1、清 翠玉白菜
長一八・七公分、縦五・〇七公分、横九・一公分。

此器利用玉之原色施以巧琢、以綠色部份琢爲菜葉、白色處施作菜身、酷似實物。葉上並琢二蝗。爲故宫所蔵「巧作玉器」中最受人矚目者。

(1公分=1cm)

図2、清 雕象牙多層球

通座高五四・八公分、球徑一
一・七公分、座徑一二・七公
分。

大球之内、套有小球、漸内漸
小、凡二十一層。每層均面雕
紋飾、旋轉自如。

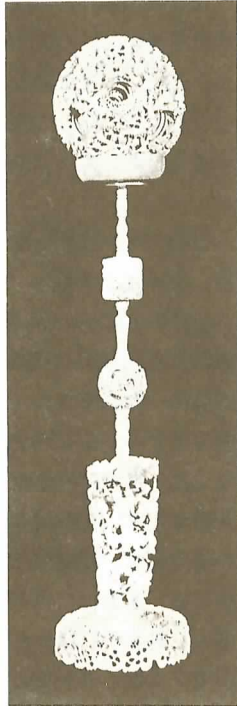


図3、父丙角

高二二・六公分、深七・四公分、寬九・四公分、腹圍
二一・八公分。

器内蓋底及器身鑿内、有相同之銘文三字。角與爵形器
之形態相似、角口上少兩柱、而多一隻獸形蓋、此為製
作上之進化。三足微往內傾斜、係配合頭（鑿）尾向前
後伸展之造型而設計。獸頭未加裝飾、與全身皆加裝飾
（饗餐紋及雲雷）之花紋、產生單純與繁複之效果。角
與爵均為溫酒器、與現在酒壺之功用相仿

図3は多数の鼎や尊のうちでも私の好きな酒容器。
仿父丙角は今私の室に飾ってある。

その他日中戦争時一時期日本にあったが、戦後昭和
天皇より中華民国へ返還された翡翠の衝立など銘品多
々のである。同院の一隅では複製品（仿）や写真集も
販売している。筆者はすでに数冊の鑄造品関係の書物
は持っているの、今回は「海外遺珍・銅器」および
その「続篇」を買って帰ったが、両方とも写真、装丁
いずれも立派なもの。約1,000 N T \$であった。

何度行っても感動と驚きの連続である。機会があれば是非一度訪れられてはいかが。

1700 ホテルで着換えて新公園にゆく。木陰やベン
チ、腰掛けられる所はすべてアベック。まだ明るい
のに。並んでオハナシどころではないノダ。園内には福
徳正神の祠。ひょうきんな顔の獅子2対。鑄鉄製砲身
が保管されていたのは望外の収穫で
あった。



1830 ホテルで顔博士を待つ。この後、欣葉で台湾
料理に舌鼓、太陽城でショーを見て帰り、メモをまと
めれば0130。アラームをセットして……と。
おやすみなさーい。

お知らせ

図書館利用に関するアンケート集計結果

(1991年1月末実施)

図書館では1月末に、皆様の利用状況、ご意見等をお聞きするためアンケートを実施し、800名近い方から回答をお寄せ頂きました。ご協力有難うございました。今回の調査は、主に、①図書館の利用状況 ②図書館の備付資料 ③視聴覚機器 ④文献複写 の4項目についてでした。集計結果は別記の通りです。この結果を十分に検討し、今後の図書館整備計画の参考にしていく予定です。

以下回答の中から目立った点を拾ってみます。

- 1.3) 1ヵ月に平均1冊も借りない(これまで借りたことがない)との回答……332名
主な理由は、1.4)参照
- 1.5) 貸出期限は、約70%の人は大体守っているようですが、実際にはまだまだ期限遅れが目立ちます。
- 2.1)(1) 開架図書冊数について、「十分+適当」と、「少ない+少な過ぎる」の回答がほぼ同数。
- 2.1)(2) 開架図書の内容に対する要望が強いようで、特に新しい図書を希望する声が多い。
- 2.1)(3) やはり専門分野(技術、工学等)の充実。
- 2.3)(1) 書架の配置状況については、「分かりにくい」との回答が90名もあり、利用案内を含め工夫の必要がある。
- 2.4) 書庫内の図書(雑誌)の案内と、利用の促進を呼びかける必要がある。
- 3.1) 図書館の設備としての視聴覚機器の設置・充実を

- 希望する声は強い。ただしこの件は、学校全体の検討課題でもある。
- 3.2)(4) 図書を検索できる装置の設置を希望。
- 4. 文献複写については、図書館での複写業務を望む声が大変強い。
- 4.1) 現在売店等での複写料金は、回答のあった内の約90%が1枚10円又は15円。
- 5. その他
 - 1) 利用面について
 - ①調査時に、使用していたスリッパへの苦情が幾つかありましたが、閲覧室は4月11日から、土足での使用に変更になっています。
 - ②借りたい図書を調べ易くして欲しい。
 - ③貸出冊数を増やして欲しい。
 - ④開館時間の延長、及び開館を早めて欲しい。
 - 2) 資料について
 - ①新たに備え付けを希望する雑誌・新聞が、各種沢山出されました。見直しの際の参考にさせていただきます。なお、6月から「くれえばん」「タウン情報ひろしま」「ポートフォリオ」の3誌を新たに備え付けました。
 - ②新しい本を多く揃えて欲しい。
 - 3) 施設・設備について
 - ①試験期の閲覧座席、ロッカー不足。
 - ②冷暖房をけちらないでほしい。

1. 図書館の利用状況	学 生	教職員	合 計
1) 利用頻度	[699]	[64]	[763]
(1) 殆ど毎日	35		35
(2) 2日に1回	31		31
(3) 3日に1回	57		57
(4) 週に1回	101	2	103
(5) 半月に1回	104	7	111
(6) 1ヵ月に1回	131	8	139
(7) 年に数回	117	22	139
(8) 殆ど利用しない	113	25	138
理由：①間に合う	56	14	70
②資料不足	14	4	18
③不便である(※)	8		8
④その他(※)	20		20
(9) その他(※)	10		10
2) 主な利用目的(複数回答可)	[1554]	[72]	[1626]
(1) 備付図書を読む	131	5	136
(2) 雑誌・新聞を読む	244	5	249
(3) 図書を借りる	220	25	245
(4) 課題等をまとめる	381		381
(5) 事項調査	75	17	92
(6) 文献を探す	159	17	174
(7) 自習の場として	134		134
(8) 時間が空いた時	190	3	193
(9) その他(※)	20	2	22

	学 生	教職員	合 計
3) 貸出冊数 (1ヵ月の平均貸出冊数)	[708]	[63]	[771]
(1) これまで借りた事がない	82	11	93
(2) 0冊	215	24	239
(3) 1～2冊	206	9	215
(4) 3～5冊	94	6	100
(5) 6～10冊	22	1	23
(6) 11～15冊	7	1	8
(7) 16～20冊	4		4
(8) 21冊以上	5		5
(9) 年に数冊	73	11	84
4) 前項で (1) 又は (2) と答えた人の主な理由	[300]	[32]	[332]
(1) 必要な場合閲覧室で読む	107	14	121
(2) 借りたい図書が無い	65	10	75
(3) 面倒である	109	4	113
(4) その他 (※)	19	4	23
5) 貸出期限について	[685]	[56]	[741]
(1) 必ず守っている	223	25	248
(2) 時々遅れる	187	12	199
(3) 度々遅れる	122	4	126
(4) 現在延滞中	42	2	44
(5) 借りたことが無い	111	13	124
6) 利用時間帯 (複数回答可)	[976]	[57]	[1033]
(1) 休憩時間	47	2	49
(2) 昼休み時間	149	5	154
(3) 放課後	439	3	442
(4) 夜間 (土曜日午後)	62	2	64
(5) 休講・自習時間	144		144
(6) 卒研時	21	1	22
(7) 特に決まっていない	114	44	158
2. 図書館の備付資料			
1) 開架図書について			
(1) 冊数	[702]	[62]	[764]
①十分	88	8	91
②適当	172	8	188
③少ない	203	7	216
④少な過ぎる	47	7	54
⑤何とも思わない	88	5	93
⑥わからない	104	18	122
(2) 内容等	[711]	[63]	[774]
①比較的揃っている	82	3	90
②新しい図書が不十分	172	16	180
③古い図書が多い	126	13	133
④必要な図書が少ない	129	14	143
⑤特に意見なし	189	26	215
⑥その他 (※)	13		13
(3) 不足だったり、内容が古いと思われる分野	[909]	[74]	[983]
①哲学、心理学、宗教等	64	6	70
②歴史、地理等	94	5	99
③社会科学	80	5	85
④自然科学	79	10	89
⑤技術、工学、工業等	225	12	237
⑥産業、交通、通信等	28	4	32
⑦芸術、体育等	81	8	89
⑧言語	51	7	58
⑨文学	74	7	81
⑩総記 (知識・学問一般、情報科学等)	80	5	85
⑪その他 (※)	53	5	58

	学 生	教職員	合 計
2) 逐次刊行物 (雑誌等)、新聞類について			
(1) 種類、点数	[708]	[63]	[771]
① まずまず各分野平均して揃っている	312	27	339
② 不十分である (具体的な分野 (※))	99	1	100
③ 特に意見なし	255	35	290
④ その他 (※)	42		42
(2) 新たに備え付けが必要な雑誌、新聞 (※)	[97]		[97]
3) 図書の書架の配置状況について			
(1) 現在の配置状況	[659]	[60]	[719]
① 今のままでよい	400	44	444
② 配置場所が分かりにくい	86	4	90
③ 何とも思わない	168	12	180
④ その他 (※)	5		5
(2) 改善すべき点 (※)	[35]		[35]
4) 書庫内図書について			
(1) 書庫内の図書 (雑誌) について	[688]	[65]	[753]
① 知っている	490	64	554
② 知らなかった	198	1	199
(2) 書庫内の図書 (雑誌) の利用	[661]	[65]	[726]
① 利用したことがある	100	40	140
② 利用したことはない	561	25	586
3. 図書館の設備としての視聴覚機器について			
1) 個人で利用できる視聴覚設備について	[690]	[64]	[754]
(1) 設置を強く希望する	257	16	273
(2) あれば利用する	253	21	274
(3) 必要ない	59	7	66
(4) どちらでもよい	116	20	136
(5) その他 (※)	5		5
2) どのような機器があればよいですか	[1093]	[84]	[1177]
(1) ビデオ装置	473	43	516
(2) CD装置	324	20	344
(3) LD装置	270	18	288
(4) その他 (※)	26	3	29
4. 文献複写について			
1) 図書館資料を、現在はどこで複写していますか	[707]	[52]	[759]
(1) 校内の売店 (※)	497	1	498
(2) 学校付近の店 (※)	163		163
(3) 学科事務室	7	22	29
(4) 学科研究室		14	14
(5) 各課事務室	2	14	16
(6) その他 (※)	38	1	39
2) 図書館への複写機の設置について	[686]	[58]	[744]
(1) 複写業務を行ってほしい	559	24	583
(2) 今まで通りで構わない	36	13	49
(3) どちらでもよい	91	21	112
3) 複写業務を行った場合には、利用しますか [複写規程により、私費の場合 1枚20円]	[696]	[64]	[760]
(1) 利用する	423	15	438
(2) 利用しない	74	24	98
(3) 複写枚数によっては利用する	114	8	122
(4) わからない	85	17	102
5. その他お気付きの点について記入して下さい (※)			
1) 利用面について (※)			
2) 資料について (※)			
3) 施設・設備について (※)			
4) その他 (※)			

注) 1. [] 内は各質問項目ごとの回答数の合計
 2. 質問事項の後の (※) は、具体的な記入を求めたもの

平成2年度 図書統計

1 利用

() 内は前年度の合計を表す。

(1) 貸出人員・冊数

開館日数 281日

学年	区分	人員	冊数
1年		673人	1,024冊
2年		719	1,184
3年		658	1,173
4年		1,119	1,885
5年		951	1,706
学生計		(4,580) 4,115	(7,702) 6,972
教職員		(290) 270	(569) 493
合計		(4,820) 4,385	(8,271) 7,465

(2) 入館者数 45,866人(42,568人)

3 文献複写依頼

依頼先	件数	枚数
国立大学		
電子式	71	3,177
マイクロフィルム		
コンテンツ	68	1,156
J I C S T	3	125
国立国会図書館		
電子式	15	1,373
マイクロフィルム		
その他	11	291
合計	(216)	(2,407)
	168	6,142

2 蔵書

区分	分類	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
		総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	工学	産業	芸術	語学	文学	
図書	和書	5,008	2,428	5,308	5,298	8,852	21,139	495	2,279	2,700	5,861	59,368
	洋書	459	466	133	220	1,206	2,968	9	41	1,346	1,293	8,141
	計	5,467	2,894	5,441	5,518	10,058	24,107	504	2,320	4,046	7,154	(66,018) 67,509
学術雑誌	和雑誌	150	8	13	55	46	267	3	25	16	10	593
	洋雑誌	11	8	1	1	23	131	3	2	88	6	224
	計	161	16	14	56	69	398	6	27	54	16	(804) 817

注 図書は冊数、学術雑誌は種類数

時間外閲覧(夜間開館)利用状況

() 内は1日平均

	開館	利用者数	貸出冊数
2月	21日	1,117人 (53.2)	293冊 (14.0)
3月	9日	406人 (45.1)	85冊 (9.4)
4月	16日	550人 (34.4)	222冊 (13.9)
5月	22日	815人 (37.0)	278冊 (12.6)
6月	25日	1,187人 (47.5)	243冊 (9.7)
7月	14日	397人 (28.4)	196冊 (14.0)
9月	20日	1,147人 (57.4)	177冊 (8.9)

編集後記

前号までに比し大きな変化はありませんが、学生、教職員が一体となって「図書だより」を発行したいという思いから、「新任教職員随想」などでは今まで以上に多くの方々の協力をいただきました。

少しでも利用しやすい図書館とするために実施されたアンケート調査の集計結果(27頁)によれば学生の利用状況は週に1回以上(31.8%)、1ヶ月に1~2回(33.7%)、年に数回または殆んど利用しない(32.8%)に3分されます。利用目的は様々ですが、「何を読む」というより、まず「新聞でも」という軽い気持ちで足を運び親しんでもらいたいものです。(図書館長補 石井義明)